

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2006～2008

課題番号：18401008

研究課題名(和文) マレーシアにおける貧困問題の地域的・民族集団的多様性に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Regional and Ethnic Diversities of Poverty Problem in Malaysia

研究代表者

藤巻 正己 (FUJIMAKI MASAMI)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：60131603

研究成果の概要：

本研究では、(1)人口・社会経済地図による俯瞰的分析、(2)クアラルンプル大都市地域やパハン州などの農山漁村、サラワク州内陸部の先住民族居住地域における虫瞰的現地調査を通じて、マレーシアにおける貧困問題の表出状況とその差異や要因について、地域的・民族集団的多様性という観点から探究した。その成果については、公開セミナーの開催、他の研究組織との国際シンポジウムの共催、そして研究報告書(180頁)の刊行をもって公開された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
2007年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2008年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総計	13,200,000	3,960,000	17,160,000

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：マレーシア、貧困問題、エスニックマイノリティ、地域開発、ツーリズム、社会経済地図、GIS

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究課題の申請時においては、マレーシアの地域研究において、貧困問題を「切り口」とする総合的・地誌的記述を志向する研究、しかも貧困状況緩和のための政策提言を行うことを前提とした研究は未見であった。

(2) 貧困問題研究の分野では、福祉地理学的

視点や、フィールドワークという虫瞰的なアプローチとGIS分析という俯瞰的アプローチとを接合した複眼的研究手法は稀であった。

(3) 貧困問題をめぐる政策的提言としては、従来、問題地区(住民)の単なる所得水準の向上という発想や手法など短兵急的な貧困状況

の「解消」策が提示されてきたが、問題地区（住民）の生活環境の改善を通じた貧困状況の「緩和」という、住民自身の生活実践やコミュニティそれ自体の参加能力と結びついた、実現可能な貧困状況からの脱出策との観点からの提言はなされてこなかった。

## 2. 研究の目的

(1) マレーシアにおける貧困状況について、GIS（地理情報システム）を援用した社会経済地図の作成・分析（俯瞰的アプローチ）と、いくつかの貧困地区における精緻なフィールドワーク（虫瞰的アプローチ）を通して、各地域／民族（エスニック）集団の貧困状況の実態を明らかにするとともに、貧困問題の多様な表出形態とその構造的要因を明らかにする。

(2) 上記(1)での成果をふまえ、福祉地理学の観点から、現行の貧困問題政策の適否について検討を加え、貧困問題の地域的／民族集団の特性や人間としての基本的欲求（basic human needs）など、住民のニーズに応じた、しかも政府・地方自治体にとって低コストで実効力を伴う、貧困地区（住民）の生活の質の向上（貧困状況の緩和）につながる政策的提言を、問題地区の地域的／民族集団の特性に留意しながら行う。その際、GIS分析を援用し、問題地区における社会的資源・サービス施設のより適正な地理的配置はいかにあるべきか、という観点からの提言も試みる。

(3) 以上をふまえ、「貧困問題」を主題としたマレーシアの地誌的記述を試みる。

## 3. 研究の方法

(1) 研究組織と役割分担

[総括] 藤巻正己

[貧困問題地区／民族集団調査グループ] 藤巻正己（クアラルンプル大都市地域／スコッター地区・オランアスリ村／外国人労働者

集住地区）およびパハン州キャメロンハイランド／オランアスリ村）・平戸幹夫（パハン州 Felda ジュンカ地区／インドネシア人労働者集住地区）・江口信清（マラッカ郊外ポルトガル人村／「ポルトガル」人）・山下清海（クアラルンプルのチャイナタウン／華人）・田和正孝（パハン州漁村スクク村／マレー人）・祖田亮次（サラワク州ジュラロン川流域／イバン人・ブナン人）

[社会経済地図作成 GIS グループ] 藤巻正己・現地研究協力者（Ruslan Rainis, Tarmiji Masron：マレーシア科学大学）

[貧困層支援政策検討グループ] 生田真人・藤巻正己

(2) 上記の役割分担のもと、貧困問題の地理的表出状況を直接的間接的に俯瞰、析出するための社会経済地図の作成とGIS分析を行う一方で、2006年～08年度の3ヵ年を通じて、上記の貧困問題各地区／民族集団を対象とした精緻なフィールドワークを実施した。

## 4. 研究成果

(1) マレーシアにおける貧困問題へのアプローチの仕方において、地域的・民族集団の多様性という観点からなされるべきことは先行研究においても共通理解されてきた。そして、半島部マレーシアを例にとれば、典型的な貧困問題表出地域は「東海岸諸州のマレー人が集住する農山漁村」であるとみなされてきた（こうした「実態」こそが、これまでのマレーシア政府によるマレー人優先政策、具体的にはマレー農山漁村地域への経済支援策の根拠となってきたことにあらためて留意しなければならない）。

(2) 本研究でも、州あるいは郡レベルでの社会経済地図にもとづいた俯瞰的分析において、「東海岸諸州」の「マレー人」が集住する「農山漁村（の住民）」が典型的な貧困地区／民族集団であるとの傾向があらため

て追認された。しかし、実態は複雑であり、分析の空間的スケールをいわゆる市町村レベルやより微細な「断片的」地区に下げた場合、政府によって貧困撲滅対象とされてきた集団/地区が、経済社会生活実態からみて必ずしもそうした定義に該当しないケースがある場合や、さらに貧困問題が当該地区や民族集団の固有の「地理-歴史」(go-history)を背景にさまざまな態様をもって表出していることが、あらためて明らかにされた。

たとえば、パハン州の漁村調査では、所得水準上、政府によって極貧層(貧困撲滅対象グループ)の一つとして定義されてきたマレー人漁民の暮らしは、生活実態からみて必ずしも深刻な貧困の悪循環のなかに囚われているとみなすことはできず、カンボジア難民を労働力として受入れることができるほどに、漁業を生業とする安定した経済社会生活が営まれていることが明らかとなった。

これに対して、国全体の貧困世帯比率が大幅に低下するなか、経済的先進地域とされてきた半島の南西部諸州において、主流社会から「忘れられ」たり、経済的困窮問題や政治社会的に自集団の存続にかかわる問題を長年かかえてきた「断片的」地区や民族集団の存在が精緻なフィールド調査(虫瞰的アプローチ)によって確認された。

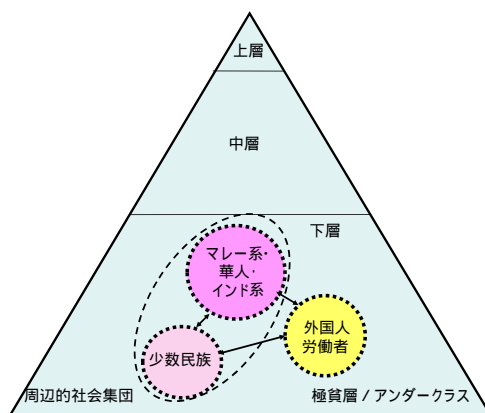


図1 マレーシア社会における貧困層の構成と位置づけ(半島部マレーシアの場合)

たとえば、1950~60年代に半島部マレーシアにおける反政府共産ゲリラ対策のために計画的に建設された約400もの華人強制移住集落としての歴史を有す「新村」(New Village)や、マラッカ郊外の「ポルトガル人」村、さらにクアラルンプル郊外やパハン州の高原リゾート地域などに居住する先住民であるオランアスリの社会があげられる(図1参照)。

華人は現在のマレーシア社会では多民族国家マレーシアを構成する三大種族の一つだが、インド系およびブミプトラ政策の恩恵をこうむっているはずのマレー人以上に所得水準が高いとされてきた。しかし、旧都市スクォッターとともに、旧「新村」住民としての暮らしを余儀なくされている華人のなかには主流経済の発展から取り残された極貧層が含まれていることが確認された。

他方、16世紀以来、マラッカなどマラッカ海峡沿岸部に定着、土着化したポルトガル人の末裔を自称する住民は、マラッカ州政府によって現在地に居住指定され、漁業を主な生業としてきた。彼らは、統計上「その他」として位置づけられてきた典型的なエスニックマイノリティの一つであり、政治経済的・社会文化的に「周辺の」地位に置かれてきたが、近年、その「ポルトガル」という「エスニック記号」をもって観光資源に読み替えられようとしている。しかし、漁場であった海域の埋め立て地でのリゾートホテルなど観光客集客施設の建設によって、表面的には「開発」されたが、住民の経済的改善がなされないばかりか、「ポルトガル人」としてのアイデンティティや文化の維持をめぐる新たな問題が表面化している。

連邦直轄領のクアラルンプルとその郊外州であるスランゴール(クアラルンプル大都市地域)は、マレーシアで最も貧困世帯率

が低く、「貧困問題がみえにくい」地域である。しかし、実際にはさまざまな態様をもって「繁栄のなかの貧困」問題の表出が看取された。図1は半島部マレーシア全体の貧困層の構成と位置づけをイメージしたものであるが、同図はクアラルンプル大都市地域のそれをも表しているといえる。すなわち、同大都市地域には、マレー系・華人・インド系の低価格アパートに再定住した元スクワッターなどの都市貧民や、大都市地域の開発過程のなかで主流経済社会に取り込まれたオランアスリなど、マレーシア政府が貧困撲滅対象と指定している社会集団が、クアラルンプル大都市地域周縁部の油やし農園やメガプロジェクト予定地に、あるいはグローバル化する建造環境の「すき間」に「断片的貧困地区」を形成していることが確認された。

また全国で200万人超が就労・滞在中と推定される外国人労働者の存在も、本研究の過程で考察の対象とされるに至った。パハン州の漁村のカンボジア難民、パハン州の国策的入植村の油やし農園で農業労働者として就労しているインドネシア・ロンボク島の出身者たち、また高原リゾート地のパハン州カムロンハイランドの農園におけるバングラデシュやインドネシアなどからのアジア系出稼ぎ労働者、さらにクアラルンプルのチャイナタウンなどの屋台や露店、食堂などの従業員の多くが中国、バングラデシュ、インドネシア、ネパール、ミャンマーなどからの労働者によって占められているという「風景」は、現代マレーシアにおける「アンダークラス」の生成を予感させるものである。

以上の半島部マレーシアにおける調査研究に加えて、東マレーシア・サラワク州の内陸部先住民地域（イバン人・プナン人の生活領域）においても精緻なフィールドワークが遂行された。この研究では、イバン人が彼

らの先祖伝来の生活空間（森林）が開発され、次第に彼らの経済社会生活が脅かされていくなかで、生存戦略の手段として、自民族集団よりも劣位な存在として眼差されてきたプナン人との通婚や改名などを通じて「プナン化」し、土地の獲得（すなわち経済社会生活の安定化）をはかるイバン人の生活世界に関する分厚い記述がなされた。

（3）本研究では、ケースは必ずしも多くはなかったが、マレーシアにおいて貧困問題に直面してきたと予察された、地理的・民族的に性格や背景を異にする地区を対象として、精緻なフィールドワークが実施された。その結果、これまでその実態が十分に解明されてこなかった「忘れられた」断片的地区／民族集団の貧困的状況についての考察と地誌的記述を通して、「マレーシアにおける貧困問題の地域的・民族集団的多様性」の一端を探究することができた。

（4）今後の検討課題としては、当該地区／住民の貧困的状況への「適応」あるいは「脱却」にかかわる個人的な生活実践の実例やコミュニティレベルでの取り組みと、それらの地区住民の生存戦略と政府の貧困撲滅政策とのかわりについての検討があげられる。その際、「貧困克服のためのツーリズム」の可能性という視点を交差させた研究プロジェクトの立ち上げを試みたい。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

— 藤巻正己、マハティールの都市「クアラルンプル 生産されるスペクタクルなツーリズムスケープ」立命館大学人文科学研究所紀要、査読無、93、2009、25-53.

— 祖田亮次、マレーシア・サラワク州に

における環境変化と「環境破壊」、史林、  
査読有、92-1、2009、130-160.

- 祖田亮次 東南アジアにおける都市 - 農村間移動再考のための視角 サラワク・イバンの事例から - E-Journal GEO、査読有、3-1、2008、1-17.

- 藤巻正己、マレーシアにおけるツーリズムの展開とオランアスリ社会 キャメロンハイランド中間調査報告、立命館大学人文科学研究所紀要、査読無、91、2008、171-200.

- 藤巻正己 トランスナショナル都市化するクアラルンプル - 変貌する熱帯のメトロポリスの民族景観 -、立命館地理学、査読有、19、2007、1-11.

- Soda, R. Mover-oriented approach to understand rural-urban interaction: a case from Sarawak, Malaysia Journal of the Graduate School of Letters (北海道大学文学研究科紀要) 査読無、2、2007、47-58.

- Soda, R., Agents on the move: living strategy of indigenous people in Sarawak, Malaysia, 2006, The Annual Report on Cultural Science (北海道大学文学研究科紀要) 査読無、119、2006、79-101.

[学会発表](計 5 件)

藤巻正己、マレーシア研究プロジェクトと社会的弱者およびツーリズム、立命館大学「貧困の文化と観光」研究会主催・立命館大学人文科学研究所後援「国際シンポジウム：社会的弱者の観光を通じての自立と自律」、2008年11月1日、立命館大学

江口信清、ツーリズム：マレーシア・マラッカにおけるポルトガル人にとっての生存の鍵、立命館大学「貧困の文化と観

光」研究会主催・立命館大学人文科学研究所後援「国際シンポジウム：社会的弱者の観光を通じての自立と自律」、2008年11月1日、立命館大学

田和正孝、マレー半島における漁村での観光の問題、立命館大学「貧困の文化と観光」研究会主催・立命館大学人文科学研究所後援「国際シンポジウム：社会的弱者の観光を通じての自立と自律」、2008年11月1日、立命館大学

祖田亮次、マレーシア・サラワク州におけるプランテーションの拡大と先住民社会、2008年度日本地理学会秋季大会、2008年10月5日、岩手大学  
藤巻正己、キャメロンハイランドのツーリズムとオランアスリ社会、2007年度人文地理学会、2007年11月18日、関西学院大学

[図書](計 4 件)

藤巻正己、江口信清編、ナカニシヤ出版、グローバル化とアジアの観光 他者理解の旅へ、2009年、246頁

藤巻正己編、立命館大学文学部、マレーシアにおける貧困問題の地域的・民族集団的多様性に関する研究(平成18年度～20年度科学研究費補助金[基盤研究(B)]) 研究成果報告書、2009年、180頁

山下清海編、明石書店、エスニック・ワールド - 世界と日本のエスニック社会、2008年、260頁

Soda, R. Kyoto University Press and Trans Pacific Press, People on the move: rural-urban interactions in Sarawak 2007、253p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤巻 正己 (FUJIMAKI MASAMI)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：60131603

(2)研究分担者

江口 信清 (EGUCHI NOBUKIYO)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：90185108

生田 真人 (IKUTA MASATO)

研究者番号：40137021

平戸 幹夫 (HIRATO MIKIO)

拓殖大学・政経学部・教授

研究者番号：10083180

山下 清海 (YAMASHITA KIYOMI)

筑波大学・生命環境科学研究科・教授

研究者番号：00166662

田和 正孝 (TAWA MASATAKA)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：30217210

祖田 亮次 (SODA RYOJI)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：20298722

(3)連携研究者

現地研究協力者

ルスラン=ライニス (RUSLAN RAINIS)

マレーシア科学大学・人文学部・教授

タールミジー=マスロン (TARMIJI MASRON)

マレーシア科学大学・人文学部・上級講師